

---

# 桜の時

ホルヘ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の時

### 【Nコード】

N4191S

### 【作者名】

ホルヘ

### 【あらすじ】

仕事も恋愛も順調にいった成河ひとみ。  
平凡な女の子で平凡な人生を歩む予定だった。  
ある日友人と花見をする約束をするまでは・・・

## プロローグ（前書き）

よろしく願います

## プロローグ

私はいたって平凡な女だ。

今年で22歳になるがすでにそれもあやうい。

なぜこんな事になってしまったのか、なぜ私がこんな目にあうのか？そればかり考えた。

そんな私の話をしようと思う。

まずは自己紹介から。

私は成河ひとみ22歳。

フリーターで付き合って5年になる彼氏がいる。

仕事は派遣会社に登録してぼちぼち稼いでいた。

恋愛も上手くいっていたと思う。とゆうか上手くいっていた。

ただお酒と音楽が大好きな普通の女だった、あの日までは…

「じゃあ今度の日曜日○○公園ね、博も誘っておくから！うん、楽しみー！じゃあね！はい」

携帯電話を閉じて今度の日曜日に決まったお花見の段取りを組む。○○公園は今桜が満開の花見スポットだ。

毎年地元住民はそこで花見をするが、最近開発により高層マンションがかなり増えた。

人から聞く話では人口が5000人増えたとか何とか。とゆう事は早めに行って場所を確保しなければならない。

あれだけ綺麗な桜が咲く公園は誰もが皆目をつけるだろう。と謎の地元愛を発揮しつつトリダイヤルを開き彼氏に電話をした。

「博？今平気？うん、あのねー今度の日曜日なんだけど……」

彼氏の予定も空いていた。

よかったー、とほっとする。

なぜなら今回のお花見は私を含めた女4人プラス彼氏達とゆう面子だった。これで私だけ彼氏これないとか大分寂しいんですけど、なんてさつき友人と話していた。

私と彼氏は毎週会う日は決まっていらない、私も疲れている時があるし、彼も疲れている時がある。

そうゆう日に会うとお互いイライラしていて大概喧嘩になってしまふ、5年も付き合つとささいなイザコザも絶えなくなってくる。くだらない喧嘩でもお互いムキになって別れ話に発展してしまう時もある。

5年経つても中身は子供のままっていうのが痛い所だが、ささいなイザコザはささいなきっかけで仲直りできてしまうものだ。

お互い好き同士であればそんなものだろう。

そんな事を繰り返した上での5年だ。

それでも私は彼氏が大好きで大好きで仕方がない、今だに付き合った当初のときめきは健在だ。

好きだとゆう気持ちが溢れると何かしてあげたくて仕方がない。今日もそんな気持ち溢れていた。

当日はお弁当を女連中で持ち寄る事になっている。

彼氏は甘い物が大好きだし、和菓子が好きだから団子でも作ってあげようと日曜日の花見の想像をしながら、彼氏の笑顔を想像しながらその日はベットに潜った。

かなり早めに起きてお弁当とおやつ準備に取りかかった。

早めに起きた理由は何も食に関してのみではなく、お化粧タイムがあるからだ。

普段仕事に行く時は大体30分で終わらせる所だが休日の遊びともなると気合いが入る。

音楽をかけながらたつぷり時間をかけてする化粧は1時間30分にもなる。

それから洋服を箆笥からひっぱりだし鏡相手にあーでもないこーでもないブツブツ言いながら納得するまでに時間はあつとゆう間に出発時間に迫っていた。

公園につきレジャーシートを広げる。

皆が来るまでにはまだ時間がある。

ちらほらと人が来ている、やっぱり早めにきて正解だったなーと桜を眺めながらボーっとする。

ちらりちらりと散っていく桜の花びらを見ながら「本当の花見ってこうゆう事かも……」なんて思っていた。

気がつけば空はオレンジ色になっていた。

え？私寝てた？と思い時計を見ると夕方の方の5時を指している。

もしかして…私やつちやつた？！

と思い携帯を開くと、着信は一件もない。

自然と日付に目が行くがああ約束した日だ。間違えてない。

焦りは徐々に怒りに姿を変えた。怒りに任せ電話帳を開き友人の多香子に電話する。

プルプル…プルプル…

『もしもし？どしたー？』

「どした？じゃないでしょ？！どーなってんの？！何してんのよ今」

『…はあ？彼氏というけどあんたこそどうしたの？』

「はあー！今日花見って約束してたじゃん、杏子は？絵里子は？ずっと待ってたんだけど？」

『…何言ってるの？そんな約束してないんだけど。ちょっとほんとどうしたの？』

「だーからー！○○公園で花見するって約束したじゃん、先週に！多香子と杏子と絵里子と私と彼氏達で、つい先週約束したばかりじゃん」

『だからしてないって。いつの話してるの？』

「何それ、冗談きついんだけど。彼氏とうちらで花見するって先週の土曜日の夜話したじゃん。」

『先週の土曜日ってうちらが遊んだ日？クラブ行った日でしょ？あ…私酔ってそんな事言っちゃった？』

「違うよ、電話で！てか先週私クラブなんて行ってないじゃん。もう5年行ってないんですけど」

『は？行ったし、最近あんた毎週行ってんじゃん』

「博に怒られるから行けないの知ってんじゃん」

『ちょ……ちよっと。本当大丈夫？』

「何が？」

『あんた2年前に博と別れたじゃん』

え…どうゆ…事……？



『てかあんたがしてる話2年前の花見の事?』

私は携帯を耳から離し口付をよく見て見ると約束したあの日から2年経っていた。

落ち着け……とにかく落ち着け。

一体どうなってるの？

私は花見をする為に家を出たよね？昨日は何してた？

うん、今日の事考えながらテレビ見て博とメールしてたよね。

朝は？お弁当の支度してた。大好きなアーティストの曲を聴きながら化粧した。途中ノリノリになりすぎて踊ったりもした。

そして今お弁当は手元にある。携帯には昨日の博とのメールもある。別れてなんかいない。

いつも通り愛を感じる文章だ。

日付は私がいた年になっている。が、携帯が指している日付はその二年後をさしている。

「信じられない……」

呆然としていると息を切らしながら多香子がやってきた。後ろには見知らぬ男。

「多香子……」ほっとしたが何故か違和感も感じた。雰囲気が違う。

「ひとみ……もうどうしちゃったのよ」

泣きながら私の肩を撫でる彼女は確かに私の知っている多香子ではないのかもしれない。

「どうも……してないよ。で、あの人誰？」

「誰って……私の彼氏の雅紀だよ？これも覚えてない？」

「あん時と違う……」

「しー！しーっ！何言っちゃってんの」

そうか、私が知ってる多香子の彼は今はもう過去の人なんだよね。悪い事した。

どうやら多香子は私を記憶喪失だと思っているらしい。

今私がタイムスリップしたとか言ったら信じてくれるだろうか？それとも精神科に連れて行かれるだろうか？

信じたい気持ちはあったが私はとりあえず状況を把握したくて記憶喪失のフリをした。

てか、実際そうなのかな？

でもそんなはずない。

確かに私は2年前にいた私だ。

私たちは場所を移した。

町並みも私がいた頃とはすこし違っていた。

まだできていなかったショッピングモール、建設中だったマンションはすでに空気がないほど人が入っている。

工事中で通行止めだった新しい道路は昔からあった道のように皆馴染んでいた。

新しいショッピングモールに入ると多香子が話をかけてきた。「オーブンした時から来てるんだけどわかる？」

「わかんない、私が覚えてるのはショッピングモールができるって事だけだよ」そっか…と呟き何かきまらずい雰囲気の流れると空気を敏感に察知したのか雅紀とかいう多香子の新しい彼氏が話しかけてきた。「ひとみちゃんとは2年前の夏多香子に紹介してもらったんだけど、分かんないか」

「ん…ごめんなさい。」とうつ向く

「いやいや！そんなつもりじゃないんだけど…な…」

余計気まずい雰囲気にしたただけだった。

カフェに入り飲み物を注文する。一人掛けのソファにそれぞれ腰掛ける。

私はずっと気になっていた事を聞いた。

「博は？なんで別れたの？」

「うん、詳しい事は分かんないわをだけど」

私たちはあの花見のあと同棲を始めたらしい。

しばらくは順調にいていたが、だんだん雲行きが怪しくなり始めた。

仕事と家事、と負担が多いわりに博の愛情を感じられないとぼやいていたらしい。

それでも同棲は続いていたが妊娠をきっかけに私たちの関係に亀裂が入った。

産みたい私と諦めてほしい博。今までのようなささいな喧嘩じゃ済まされる事じゃなく、毎日話し合っでは喧嘩になっていたようだ。

私は親に猛反対を受け、彼氏にも反対され多香子に毎日泣きついていたらしい。

だが結局は堕胎とゆう結果に。

結婚して責任をとると博は言っていたが毎日泣きながら暮らしていた私は当たり所となった博に恨みつらみをぶつけ最初はただ聞いていた博もしばらく経つと言い返すようになり喧嘩が絶えず、結果別れた。

私はその事実を聞いてもピンとこなかった。

これが自分の話？

それから私は博の事を1年間引きずっていた、戯れに誰かと付き合っっては好きになれず博と比べその度まだ彼が好きな自分を認識して

いた。

「その１年間はほんと見てられないほど落ちてたよ…。」  
「それ以降の１年は？」

１年とゆう月日は私に遊ぶ余裕をもたらしたらしく、徐々にだが表に出るようになっていった。

そして毎週クラブに遊びに出るようになったらしい。  
まるで昔の私のようなのだ。

確かに彼と付き合う前の私は遊び呆けていた。  
昼間の仕事？なにそれ？って感じで真面目に仕事もしなかったし、むしろ仕事を遊び半分でやるような何より遊ぶ事が大事な子だった。それを変えてくれたのが博だった。

根っから遊び人の私と根っから真面目の彼。  
釣り合うはずもなし、意見が合う事なんて一度もなかったがお互い惹かれた。

１年、また１年と経つ度に私は変わっていった。  
変わった時は「まさかひとみがね〜」とか「革命が起きた」なんて友達にも笑われた。

でもだからこそ夢中になれた相手だったのだ。  
価値観も１８０度違うからこそ喧嘩もあったが、ときめきも色褪せる事がなかった。

永遠に続くと思っていた関係はこんな形で幕を閉じた。

自ら味わう事もなく。２年前の思いを抱えたまま。

## 2 (後書き)

一話2000文字にしようと思ってます。少ない……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4191s/>

---

桜の時

2011年4月22日13時31分発行